

Weekly Survey

ミャンマーの総選挙は野党全国民主連盟（NLD）が圧勝。軍事政権側のたび重なる野党の選挙運動への妨害にもかかわらず、民主主義と自由を切望する国民はその意思をはっきりと投票で示した。次は NLD 書記長アウン・サン・スー・チー女史の政治的復権が焦点に。

中嶋嶺雄

今週のカバー・ストーリー “Surprise! Sruprise!” (pp. 12-17) は、去る 5 月 27 日に行われたミャンマー（旧ビルマ）での総選挙の様を取り上げている。

30年ぶりに実現した今回の複数政党制による総選挙では、アウン・サン・スー・チー女史率いる野党の全国民主連盟（NLD）の圧勝が確実となった。

ミャンマーでは1988年に大規模な民主化運動が行われ、26年余り存続したネ・ウィン独裁政権が倒されたが、政権はたちまちソウ・マウン将軍率いる国軍のクーデターによって奪われた。その際、数千人に上る犠牲者が出たともいわれている。

今回の総選挙はかねてから現政権が公約していたものであったが、野党にとっては不利な条件下での闘いとなった。NLD 書記長のスー・チー女史は自宅軟禁された上に立候補も許可されず、集会の規制も行われて、現政権批判を禁じられた。

このように厳しい条件下での選挙戦ではあったが、投票、開票自体は公正に行われたことを NLD 側も認めており、そのことはともかくもミャンマーの政治史においてそれなりの評価はできるだろう。

NLD の大勝は、民主化・自由化を切望した民意の反映であり、現政権は民意を尊重し、早急に政権を委譲すべきである。しかし、現政権は新憲法制定まで政権交代を保留する方針を確認しており、軍事政権が秩序回復を理由に強権を発動する可能性もある。“The View from the Karen Stronghold” (p. 16) で取り上げているカレン族ゲリラのような少数民族問題も深刻であり、また、NLD 自体の内部分裂も懸念すべき問題となっている。

選挙では圧倒的勝利を収めた NLD ではあるが、これから先、政権を握ったとしてもどのように民主化を推し進めてゆくのか、前途は多難である。

日本はミャンマーへの最大の援助国であり、昨年春には現軍事政権を西側として初めて承認して内外の批判を浴びた。日本政府は今回の選挙の結果をミャンマーの民主化への歴史的転機として真剣に受け止め、その進展を冷静に見守ってゆくべきであろう。

東南アジアから目を南西アジアへと転ずると、そこにはアラブとイスラエルとの宿命的な対立の構図が依然として残っている。ブッシュ大統領とゴルバチョフ大統領との先週の米ソ首脳会談に示されたように、世界は対立から強調へと大きく動いているなかで、“Sword of the Arabs” (pp. 32-33) は今日でも研ぎ続けられている。

先週、バグダッドでは、アラブ・サミットが3日間開催された。「もし、イスラエル側が武力を行使するのならば、こちらも武力でそれに応じる」旨をサダム・フセイン・イラク大統領は開会の辞で述べていた。

ここ数カ月間の彼の政策といえば、もっぱら「武力



投票に向かうミャンマー市民



米ソ首脳会談はこれから定例化

の誇示」であるが、8年間のイラン・イラク戦争で、100万もの人命を犠牲にしながらもおフセイン大統領は武力を誇示したいようであり、それはアラブ世界のトップの座を死守したいためだ、と *TIME* の記者は見ている。

歴史はいま大きく動いているが、6月3日に共同記者会見が行われた米ソ首脳会談（サミット）に関しては“*The Last Picture Show*” (pp. 18-22)、“*Capitalists over Corn Bread*” (p. 22)、“*Helping Moscow See the Light*” (p. 23)、“*The End of Another Cold War*” (p. 24)の4つの記事が掲載されており、どれも興味深い。

“*The Last Picture Show*”では、米ソ首脳会談がもはや喝采に値する特別な出来事ではなく、日常的なものとなったことが強調されている。「冷戦の終わりの始まり」という国際環境の中で、米ソはお互いに助け合いながら困難に立ち向かう夫婦にたとえられている。今回合意に達した核軍縮、通常戦力兵器削減、米ソ貿易の諸問題についても詳細に解説され、とくにソ連の経済復興と密接にリンクしている貿易問題については、リトアニア独立の問題と絡めて綿密な検討が加えられている。後半部分では、スポーツを好み、友人をもてなすのが得意だといわれているブッシュと、「ペレストロイカ」が唯一の趣味とからかわれ、「仕事は仕事、友情は友情」(“*Business is Business, Friendship is Friendship*” [p. 22])と割り切るゴルバチョフとの性格の相違が巧みに描写されていて面白い。

“*Capitalists over Corn Bread*”は、ホワイト・ハウスで催された公式晩餐会ばんさんかいのリポートである。この晩餐会には、フォード会長のハロルド・ポーリング、プリンストン高等研究所の伝説的なソ連研究者ジョージ・ケナン、ワシントン・ポスト発行人のドナルド・グラハム、著名なキリスト教伝道師（エヴァンジェリスト）ピリー・グラハム牧師、米通商代表部（USTR）のカーラ・ヒルズ女史らをはじめ米国を代表する著名

人たちが集まったという。リポートは、蠟燭ろうそくの火と歴史の独特な雰囲気（aura of history）が人々を親密にさせ、その晩は魔法の力が働いていた、という文句で結ばれている。

“*Helping Moscow See the Light*”は、統一ドイツの北大西洋条約機構（NATO）加盟問題を、統一独政府自身の裁量が重視されることを前提としながら論じたものである。

サミット特集の最後を飾っているのは、バーバラ・ブッシュとライサ・ゴルバチョフのふたりのファースト・レディーにスポットを当てた“*The End of Another Cold War*”である。アメリカの女子大の名門ウェルズリー大学の卒業式にふたりは参加し、バーバラはそこで演説をしたが、夫に頼らず自らの力で道を切り開いて行くことを求められている卒業生たちの間では、反発もあったという。彼女たちに対してバーバラ・ブッシュは、仕事・キャリアの重要さとともに家庭の大切さを説いたとのことである。

ここが *TIME* の面白いなのだが、“*From the Publisher*” (p. 1)には、ローマ駐在の3人の女性記者による4年に一度の世界・カップ（サッカー）取材の裏話が述べられている。3人とも一度もサッカーの試合を観戦したことがないようだ。

Sceneは、“*Farewell to a Violin Master*” (p. 11)と題して、先日亡くなったハンガリーのジプシー音楽界の長老ギュラ・ファークスについて特集している。

最後に見逃してならないのは、*Milestones* (p. 58)欄の、*TIME* の表紙を飾ったこともあるヒギンズ教授（『マイ・フェア・レディー』）ことレックス・ハリソン（82歳）の死亡記事である。イギリス紳士の典型を長年演じてきた彼は、昨年ナイトの爵位を授かったばかりであった。

（なかじま みねお／東京外国語大学教授）

タイムスコープ



June 11, 1990

ミャンマー総選挙は反政府派が圧勝

ショーからルーチンへの米ソサミット

タイムマラソン